

物語の方法

朝顔が選んだ生き方——『源氏物語』における役割を考察する

清水 千香子

1. はじめに 朝顔という女

男女の関係を描くとき、「会わない時間」の設定は新たな展開を促すのに効果的な手法である。「距離をおいたこと」で、相手がかけがえのない存在だったことに気づく」という筋書きなどは、もはや手垢のついた古典的なものと言っても差し支えないだろう。また、「会わない時間」が登場人物の心に変化をもたらし、それまでの人間関係から誤解や偏見を洗い落とす場合もある。その卑近な例として、一九八九年公開のアメリカ映画『恋人たちの予感』(原題 *When Harry met Sally...*)^①のあらすじを追ってみた。ノーラ・エフロンの脚本によるこの映画は、反発しあう男女が出会いから十年余りの歳月を経て、ようやくお互いを最良の相手と認め合い、結婚を決意するまでの過程が描かれる。

一九七七年、一組の男女が一台の車に乗り込んでシカゴを出発する。初対面のふたりは、女の親友が男の恋人だったという関係でニューヨークまで同行することになったらしい。どちらもかの地で職を得て、人生の新しい一步を踏み出そうとしている若者である。しかし、車中という閉鎖的な空間でも、食事に立ち寄った店でも、二人は一向に反りが合わない。「人生はこれからだ」と考える女と「毎日『死』を考える」という男は、「男女の間に友情は成立するか」という論争でも真つ向から対立し、結局目的地に着くとそのまま別れてしまう。それから五年後、二人

は偶然にもある空港で再会する。このときの男は結婚間近であり、女にも恋人がいて、どちらも公私ともに充実していることがうかがえる。しかし、お互いの人生が順調であっても、反りが合わないのは五年前と変わらない。さらに五年後、今度の再会の場所はニューヨークの書店である。ともに三十歳を越えた二人にはそれぞれ「試練のとき」があったように、女は恋人と別れたばかり、男は妻に去られて癒しがたい心の痛みを抱えていた。ここでようやく二人はお互いを「友だちとして」認め合う関係を築き始める。映画は最初の出会いからこの瞬間までに上映時間のおよそ三分の一を使うと、三度目の出会い以降は時間をとばすことなく、結婚までの紆余曲折を描いていく。もともと、その流れの中で「男女の間に友情は成立するか」という問いかけは宙に浮いてしまうが、結婚という結末そのものが答えなのかもしれない。蛇足ながら、この映画は携帯電話やインターネットが社会生活を侵食する前、固定電話が男女をつなぐ重要な小道具だった時代を描いている。

最初はいい感情を持っていなかった相手が実は望ましい人物であったことに気づき、最後にはその相手と結ばれるという物語は、ジェーン・オースティンの『高慢と偏見』(一八一三年)を典型として数限りなく再生産されてきた。映画の中でも、書店での出会いに立ち会った女の友人が、『バルカン超特急』を引き合いに出して女をけしかけけるシーンが挿入されている^②。『高慢と偏見』の場合はダーシーの心の変化や行動が、エリ

ザベスの思い込みを打ち砕いて結婚という結末へと発展する。映画『恋人たちの予感』では、「会わない時間」にそれぞれが別の場所で積み重ねた経験、そしてそれを通して内面に刻まれた失意や孤独感がお互いに対する頑なな思いを溶解させるのに一役買ったようにみえる。

時間をかけて結実する愛——多くの観客や読者はこのような物語に對して好意的である。しかし、時間をかけても実りそうで実らない愛があるとすれば、それはそれで非常に興味深い物語になるのではないだろうか。おそらく平安時代から今日に至るまで、無数の読者が思ったはずである。「朝顔はなぜ源氏と結婚しないのか」と。

式部卿宮の姫君・朝顔には独特の佇まいがある。作者の求めに応じてふいに顔を見せたかと思えば、源氏の魅力にひれ伏すこともなく冷静に状況を把握する。登場することで周辺にささやかな波が立つことはあっても、物語に新たな局面を開くような大仕事はしない。そして、源氏の伴侶としてふさわしい身分と心映えを持ちながら、長年にわたる求愛を頑なに拒み続ける。この「源氏を拒み続けた」という態度は、朝顔という女君を最も特徴づける点として強く意識され、様々な視点からその理由が論じられてきた。二世女王としての出自や賀茂の齋院を務めたという経歴から、結婚は望ましくないという判断につながったという説、後年朝顔の住まいとなった「桃園の宮」が持つ機能との関連、また「朝顔」という呼称にこめられた意味とそこから浮かびあがる人間像など、先行研究を繙けば、朝顔の「結婚拒否」にまつわる謎解きの深さと広がりを感じる事ができる。ただし、物語の中から源氏拒否の直接の理由を見つけるならば、次の一点に尽きるだろう。《朝顔は必ずしも源氏に無関心というわけではなかったが、源氏の愛情を失った女（六条御息所）にのしかかる現実を目の当たりにして、相手のものにならないことを選択した。》

朝顔に高貴な身分や洗練された感性を与えて「源氏の伴侶にふさわしい状況」を整えたのも、六条御息所と接近して登場するのも、齋院という地位を巧みに利用して「源氏が近づけない時間」を設定したのも、さらに、齋院を退いた後も源氏との接点がなくならないのも、「自分のものにならない女」に執着し、縮まることのない距離に嘆息しながら年齢を重ねる源氏の姿を物語に取り込むためではなかっただろうか。そして、源氏にため息をつかせた朝顔自身は、他の女性とは一線を画す個性的な女君として忘れがたい印象を残すことになる。

本稿では朝顔の源氏に対する態度を「心を寄せながらも、つかず離れずの関係を維持しようとする態度」と解釈し、朝顔が担う物語上の機能を確認しながら、この人物を「恋愛のひとつの様相」を体現した人として受け止めたいと思う。そのうえで、朝顔の生き方を通して作者が描こうとした男女の関係の一面を分析してみたい。

なお、本文は『新編日本古典文学全集 源氏物語』から引用した。また文中、巻名に先立って付加した丸数字はその巻が五十四帖において何番目に位置するかを示すものである。『源氏物語』をめぐっては「欠巻」の存在なども論議されているが、本稿ではこの女君が登場するタイムミンクを問題にすることとし、便宜上あくまで一般的に知られている順番を示した。

2. 「葵巻」までの朝顔

——六条御息所との関係を中心に

次の表は朝顔が実際に登場する巻、および朝顔に関する言及がみられる巻を示したものである。

さりとして、人憎くはしたなくはもてなしたまはぬ御気色を、君も、なほことなりと思しわたる。^④

引用Aのように、後に焦点を当てる女性の存在を事前にさりげなく告知するのは朝顔だけにみられる手配ではない。「いかで似じ」と朝顔に思わせた六条御息所もまた、「⑨葵巻」で取り上げられる以前、「④夕顔巻」の巻頭「六条わたりの御忍び歩きのところ」という一節でその存在が示されており、作者にとっては手慣れた手法のひとつだと言える。

ところで、源氏を間に挟んで朝顔と六条御息所が鮮やかな対比をなすことは、これまでも多くの先行研究で指摘されており、その際必ず言及されるのが、引用Bの傍線部「いかで人に似じ」である。あの方のようにはならない——朝顔がこの決意を固めたとき、視線の先にいた六条御息所は齋宮に卜定された娘と伊勢へ下向すべきかどうか迷っていた。源氏の冷淡な態度は人々の知るところとなり、ついには桐壺院が「軽々しうおしなべたるさまにもてなすながいとほしきこと。」^⑤と叱責するまでになっている。しかし、源氏は「似げなき御年のほどを恥づかしう思して心とけたまはぬ気色なれば」^⑥とその責任を六条御息所に転嫁するばかりで、関係を修復しようとの気持ちは見えない。愛情を失ったこと、自分の身分にふさわしい扱いを受けられないこと、それでも思いを断ち切れないこと、苦悩を世間に知られること、そうしたことが誇り高き貴婦人にとってどれほど苦痛を与えたかは想像に難くない。作者はそんな六条御息所の苦しみを「かかること」の一言でまとめると、朝顔に「いかで人に似じ」との決心をさせる。しかし、その態度を完全な拒絶にまで硬直させることは避け、「人憎くはしたなくはもてなしたまはぬ御気色」を示す程度に止めることで、かえって源氏の執心を煽るような状態をつくる。かくして、源氏との距離を礼儀正しく保とうとする朝顔と、遠ざ

けられるたびに朝顔への好意を再認識する源氏との関係は読者の知るところとなるのである。

「⑨葵巻」には朝顔の登場する場面がもうひとつある。それは「車争い」の後、屈辱にうち拉がれながらも、源氏の姿を見ずにはいられない六条御息所の姿を描いた直後に続く。

C 式部卿宮、棧敷にてぞ見たまひける。いとまばゆきまでねびゆく人の容貌かな、神などは目もこそとめたまへ、とゆゆしく思したり。姫君は、年ごろ聞こえわたりたまふ御心ばへの世の人に似ぬを、なのめならむにてだにあり、ましてかうしもいかで、と御心とまりけり。いとど近くて見えむまでは思しよらず。若き人々は、聞きにくきまでできこえあへり。^⑦

式部卿宮や女房たちの賞賛の中、初めて源氏の姿を目の当たりにした朝顔の心は揺れている。しかし、すぐさまその心に反して、源氏との距離を縮めるつもりがないことが語られる。

この場面で注目したいのは、朝顔の胸の内もさることながら、朝顔が新齋院御禊の日に行列を見物していたこと、すなわち六条御息所と同じ場所にて同じものを見ていたということである。重要な神事に都の貴人が集結するのは当然のことであろう。ただし、「車争い」の当事者である六条御息所は、「源氏の姿を一目でも見られたら」との思いからお忍びで出かけており、もうひとりの当事者葵の上は、気が進まないところを若い女房たちにせがまれて出かけている。「車争い」という運命の瞬間に向けて、あたかも作者から背中を押されるように二人の女は出かけているのである。一方、この二人にとっての「運命の日」に、朝顔は「なぜここにいるのか」という説明があるわけでもなく、同じ場所に居合わせ

ながら源氏を冷静に「観察」している。このとき、源氏は朝顔の視線に気づいていたであろうか。引用Bにおいても、朝顔は噂を通して六条御息所の苦悩を知ることができた。しかし、六条御息所は式部卿宮の姫君が自分の屈辱的な状況を把握していることに気づいていたであろうか。この「観察する人」という立場は、朝顔という人物を語る場合、特筆すべき点だと言える。観察の結果、朝顔は当事者には見えない現実を知り、未来を見通して自分の生き方を決めることができた——もしくは、自分の行く末を定める心の強さを得たとでも言えばよいだろうか。その反対に、一途に思い詰めるばかりの六条御息所は、おのれを客観的に見る余裕もなく、結局は誇り高き貴婦人にふさわしくない状況を受け入れざるを得なかったのである。愛情を受け入れたがために背負う生々しい苦悩と、受け入れないことで保たれる心の平穩。この対照は物語の主題と決して無関係ではないというのはい過ぎであろうか。

六条御息所が朝顔とことさら接近して描かれているように、源氏もまた二人の女を同じ視界の中で見ているようである。晩秋、葵の上に先立たれた源氏のもとに濃い青鈍色の紙に書かれた文が届けられる。菊の枝に付けられていたその文は六条御息所によってしたためられたもので、能筆の人による筆の跡は「常よりも優にも書いたまへるかな」と源氏を感心させ、下に置きかねる気持ちを抱かせる。しかし、葵の上を失った源氏を「人の世をあはれと聞くも露けきにおくる袖を思ひこそやれ」といたわる歌も、生霊に遭遇した源氏の心に届くことはなく、「つれなの御とぶらひやと心憂し」と厭わしく思わせるだけであった。それでも非礼を避けるために、源氏は紫の鈍める紙を選んで「とまる身も消えしも同じ露の世に心おくらむほどぞはかなき」と返す。

源氏と朝顔との間で文が交わされるのは、そのすぐあとである。

D なほいみじうつれづれなれば、朝顔の宮に、《1》今日のあはれ

はさりとも見知りたまふらむと推しはからるる御心ばへなれば、暗きほどなれど聞こえたまふ。絶え間遠けれど、さのものとなりにたる御文なれば咎なくて御覽ぜさす。《2》空の色したる唐の紙に、

源氏「わきてこの暮こそ袖は露けけれもの思ふ秋はあまたへぬれど

いつも時雨は」とあり。《3》御手などの心とどめて書きたまへる、常よりも見どころありて、「過ぐしがたきほどなり」と人々も聞こえ、みづからも思されければ、「大内山を思ひやりきこえながら、えやは」とて、

朝顔 秋霧に立ちおくれぬと聞きしよりしぐるる空もいかがとぞ思ふ

とのみ、ほのかなる墨つきにて思ひなしくし。⑤

引用Dから読み取れるのは源氏の朝顔に対する信頼と敬意である。傍線《1》には「あの方なら今の自分の気持ちをわかってくれる」という源氏の期待が滲んでいる。加えて、六条御息所には「喪中」にふさわしい紙を用いたのに対して、朝顔には舶来の紙を使い、筆跡も特に入念なものであった。(傍線《2》《3》)そして、六条御息所の場合と違って、朝顔には自分から文を送っている。以下は引用Dの続きである。

E 何事につけても、身まさりは難き世なめるを、《4》つらき人し

もこそと、あはれにおぼえたまふ人の御心さまなる。《5》つれなながら、さるべきをりをりのあはれを過ぐしたまはぬ、これ

こそかたみに情も見はつべきわざなれ、《6》なほゆゑづきよし

過ぎて、人目に見ゆばかりなるは、あまりの難も出で来けり、
《7》対の姫君をさは生ほしたてじ、と思す。¹¹⁾

わずか数行のうちに、作者は「相手が冷たければ冷たいほど執着する」という源氏の性情を語り（傍線《4》）、源氏にあらためて朝顔の人柄を評価させると、「こういう人こそ最後まで情けを交わすことができるのだらう」と考えさせ（傍線《5》）、六条御息所に対する批判めいた思い（傍線《6》）を「対の姫君（紫の上）はそんなふう育て上げたりはすまい」とまで膨れあがらせる。ちなみに『全集』は傍線《6》を次のように現代語訳している。「なんといっても、わけ知りめいて風流の度が過ぎ、人目につくくらいになると、あらずもがなのよけいな難点も出てくるというもの」

繰り返しになるが、引用D・Eからは源氏の朝顔に対する評価の高さがはつきりと読み取れる。「②朝顔巻」以降の両者の関係（後述する）を思い起こせば、傍線《5》の人物評が中年になってからの二人の関係を暗示する「伏線」として機能しているのは明白であろう。その一方で、源氏の六条御息所に向けられる視線はきわめて厳しい。もちろん、葵の上を取り殺された源氏にしてみれば、たとえ六条御息所を生霊になるまで追い詰めたのが自分であったとしても、「つれなの御とぶらひやと心憂し」とは当然の感想である。しかし、六条御息所の「お悔やみ」そのものは、朝顔の返事と同様、配慮の行き届いたものではなかったか。¹²⁾

源氏が朝顔と六条御息所を見比べるのは、たとえそれぞれに抱く感情に大きな隔たりがあったとしても、もともと二人がよく似た存在だからである。よく似た存在でなければ「比較」の対象にはなりえない。「よく似た」という表現に語弊があるとすれば、共通点が多い者同士と言いつてもよい。一方は式部卿宮の姫君、もう一方は元東宮妃、どちらも「上

の品」であり、洗練された感性や趣味の良さを備えた貴婦人である。もちろん「齋院」という立場に縁があることも重要な点のひとつである。その両者が、源氏からかくも異なる扱いを受けるのは、源氏の「つらき人しもこそと、あはれにおぼえたまふ人の御心さま」という性情が大きな理由であることは間違いない。その性情を真正面から証明するのが「なびかない朝顔」であり、裏側から証明するのが「なびいてしまった六条御息所」なのである。いずれにせよ、朝顔を思うにつけ六条御息所が疎ましくなる源氏、六条御息所を「教訓」に源氏との距離を縮めようとしていない朝顔、そして、ひたすら自分の殻の中で苦悩する六条御息所、この三者が作り出す様相は、物の怪も現れる波乱に富んだ「⑨葵巻」にある種の深みを与えていると言えよう。しかし、この二人の女は次巻「⑩賢木巻」で源氏の前から姿を消してしまうのである。

3. 朝顔がない時間——急な退場、長い不在

葵の上亡き後、再婚相手にふさわしい女たちが次々と源氏から離れ、紫の上が「最愛の人」に据えられることは数多くの研究で指摘されており、その流れの中で六条御息所が「刺客」の役目を果たしたことも広く知られている。¹³⁾朝顔が賀茂の齋院になったのも、「⑨葵巻」「⑩賢木巻」で実行されたこの「紫の上浮上」に絡んでのことだと考えられる。ただし、朝顔を齋院にするためには多少の無理を覚悟する必要があった。というのも、当時の習慣では齋院に選ばれるのは通常内親王であり、女王である朝顔が卜定される可能性は、本来ならきわめて低かったはずだからである。¹⁴⁾それでも、「さるべき皇女やおはせざりけむ」の一言で、作者は朝顔を源氏の手の届かないところへ送り込んでしまう。そうまでして朝顔を遠ざけた背景には紫の上の「社会的な立場の弱さ」があり、愛情

の深さと妻としての立場は連動しないという当時の結婚事情が影響しているであろう。つまり、同じ皇族の血筋であっても、有力な後見を持たない紫の上と、親王家筆頭の家柄の姫で齋院にも選ばれるような朝顔とでは比較にならないのである。しかも、源氏が朝顔に好意を抱いているとなれば、朝顔が源氏の再婚相手としては最有力の候補とされてもおかしくない。それゆえ、紫の上の浮上を実現させるためには、既成事実のある上の品・六条御息所ともどもできるだけ早く退場させる必要があったのである¹⁵。ただ、ここで注意しておきたいのは、齋院という地位につけることは一時的な隔離にすぎず、父・式部卿宮が娘より長生きしない限り、いつかは源氏の周辺に戻すときが来るとのことである。そしてそうなると、戻したあとの朝顔にどのような生き方と役割を与えるかは大きな課題になったはずである。

ところで、既に述べたように、朝顔には本人の思いとは関係なく、ただそこに存在しているというだけで周辺に波を立てることがある。作中で朝顔が「したこと」はごく限られている。文のやりとり、新齋院御禊の行列見物、齋院としての奉仕、そして、明石の姫君入内の際、薫物合に黒方を調進したことなどがそれで、そのうち齋院になったのは卜定の結果であり、黒方を調進したのも源氏に請われてのことであった。平安時代の「上の品」の女性として、生き方がとりわけ消極的だったとは言えないだろう。しかし、同じ「上の品」の六条御息所が生霊になり死霊になりして源氏やその周辺に暗い影を落とし続けたことを思えば、穏やかで落ち着いた役回りではある。ところが、そんな静かな女君の存在が、源氏放逐を画策する右大臣の口の端にのぼると、たちまち不穏な空気が漂うのである。

F 齋院をもなほ聞こえ犯しつつ、忍びに御文通はしなどして、け

しきあることなど、人の語りはべりしをも、世のためのみにも
あらず、わがためにもよかるまじきことなれば——¹⁶

「⑩賢木巻」で、右大臣は弘徽殿太后の前に、源氏が神に仕える齋院に言い寄っていると糾弾する。このときの右大臣は源氏と朧月夜との密会を問題にしており、弘徽殿太后を激怒させ、源氏に謀反の罪を着せるきっかけもそこにあるわけで、齋院云々はこの場合ついでの話題に過ぎない。しかし、またしても唐突に齋院（朝顔）の名前が引き合いに出され、今回は源氏の不行跡を糾弾する材料にされている。

ここで注目してみたいのは、朝顔が「⑩賢木巻」で物語からいったん姿を消した後、「⑳朝顔巻」で本格的な再登場を果たすまでの展開である。試みに「⑪花散里」から「⑲薄雲」までの九巻で起こった主な出来事を列挙してみる。

花散里との出会い	⑪花散里巻
須磨へ退去	⑫須磨巻
明石の上との出会い	⑬明石巻
帰京	⑬明石巻
明石の姫君の誕生	⑭濔標巻
六条御息所の死	⑭濔標巻
末摘花との再会	⑮蓬生巻
空蟬との再会	⑯関屋巻
秋好中宮の入内	⑰絵合巻

紫の上、明石の姫君を引き取る。

⑱ 松風巻

太政大臣（葵の上の父）の死

⑲ 薄雲巻

藤壺の死

⑲ 薄雲巻

冷泉帝、出生の秘密を知る。

⑲ 薄雲巻

式部卿宮の死

⑲ 薄雲巻

この九巻では、源氏の人生の重大な局面（須磨への退去、絶対的な思慕を寄せる女性の死、犯した罪の露呈）が描かれ、さらには青年時代に関わった女性たちのその後が示されると同時に、六条院造営の動き（⑳少女巻）に向けて、そこに住まうことになる女たちが順次登場する。また、将来源氏の栄達に貢献するふたりの姫（秋好中宮・明石の姫君）が登場することも忘れてはならない。要するに、朝顔と接点がない時期、源氏は苦しい今を乗り越え、過去と対峙し、将来に布石を打っていたのである。しかし、賀茂の齋院であった朝顔はこうした動きに関われない状況にあった。あれほど源氏に疎まれた六条御息所でさえ、須磨にいた源氏と文通の機会があったのに、朝顔は気配を見せない。つまり九巻の間、朝顔が源氏の心の中も含めて、「その場」をかき乱す機会はなかったのである。

恋愛感情を長期間持続させることは容易ではない。たとえ、源氏に「つらき人しもこそと、あはれにおぼえたまふ人の御心ざまなる」という性情があったとしても、青年時代から三十を過ぎる頃まで、朝顔という女性をひたすら思い続けるのは無理もあろうし、朝顔にしても十数年も源氏の愛情と関心を失わないまま、つかず離れずの微妙な関係を維持できたかどうかは疑問である。なによりそのような描き方をすれば、源氏と紫の上との関係が曖昧かつ脆弱なものになってしまう。それゆえ、紫の上

上のために設定された「会わない時間」が、皮肉にも朝顔に「長年の思われ人」という立場を与えたように思えてならないのである。ただし、映画『恋人たちの予感』の男女のように、源氏と朝顔にも着地点を用意しなければならぬ。それが実行されたのが「⑳朝顔巻」「㉑少女巻」なのである。「会わない時間」は源氏にとって波乱に満ちた時間であった。もともと、その波乱を共有しなかった朝顔の前に再び求愛者として現れるとき、源氏は青年時代とさしてかわらぬ振舞い方をする。しかし、歳月は確実に源氏をひとりの中年男性に変えていたのである。

4. 「朝顔巻」の二人——「帚木巻」から十六年経って

G 宮、対面したまひて御物語聞こえたまふ。いと古めきたる御けはひ、咳がちにおはす。このかみにおはすれど、故大殿の宮はあらまほしく古りがたき御ありさまなるを、もて離れ、声ふつかにこちごちしくおぼえたまへるもさる方なり。^⑳

九巻の空白を経ての再登場を「㉒玉鬘巻」からの展開にむけて手配された「整理」と読むこともできよう。源氏の人生が新しい段階をむかえ、取り巻く女性たちにも一種の世代交代があるならば、朝顔の「今後」が方向づけられても不自然なことではなく、また、少なくとも源氏との関係に結着をつけておかなければ、もう少し先で起こる女三の宮の降嫁にも都合が生じてしまう。ただ、興味深いのは、朝顔の登場に際して、作者が一工夫している点である。

「㉑朝顔巻」は源氏が「例の思しそめつること絶えぬ御癖」で朝顔に近づこうとする場面から始まる。亡父の旧邸桃園の宮に移り住んだ朝顔に会うために、源氏は同じ邸内に住む叔母の女五の宮を利用し、「そなたの

御とぶらひにことづけて」と足を運ぶ。引用Gは、源氏が女五の宮に對面したときの模様を伝える一節である。作者は「あらまほしく古りがたき御ありさま」を保っている故大殿の北の方（故葵の上の母）に對して、その妹女五の宮は年を取って咳を繰り返し、声も太く聞こえるなどと描写すると、それを「さる方なり」とまとめる。つまり、太政大臣の正妻として生きた姉と比較して、同じ皇女でありながら独身生活を続けた妹の人生を「それなりのご境遇ゆえだ。」と云うのである。このとき、故桐壺院（女五の宮たちの兄）の崩御から十年の月日が流れていた。式部卿宮にも先立たれた心細さを抱え、じわじわとさびれていく邸の中で退屈な繰り返言を吐き続ける老女は、確かに独身皇女のなれの果てとしか言いようのないありさまである。

この女五の宮と大宮との比較に関して、藤本勝義氏は、「桐壺院の妹宮として出てきている以上は、大宮との対比は必然的であろうが、この二者の違いはそれぞれの立場の違いと関係し、朝顔卷の主題性と係わる無視できぬものとなっていると思われる。」と分析されている。さらに藤本氏は皇女の結婚がきわめて難しかった時代において、大宮の降嫁は「これ以上の榮達はないといつてよい」といえるほど、稀にみる成功例であったことを強調されている¹⁸。それを裏付けるのは、女五の宮のこの言葉である。

「三の宮うらやましく、さるべき御ゆかりそひて、親しく見たてまつりたまふを、うらやみはべる。この亡せたまひぬるも、さやうにこそ悔いたまふをりをりありしか。」¹⁹

降嫁して幸い人の人生を送る大宮への羨みは、源氏を婿にできなかつた式部卿宮の後悔を語ることで、自分とよく似た境遇の朝顔に對する思いにつながっていく。

いったい「⑳朝顔卷」が女五の宮の登場とともに幕を開けるのはなぜ

だろうか。源氏と朝顔について語ろうとするとき、独身皇女の哀しい姿を遠慮のない言葉で描き出したことにはやはり明確な意図が感じられる。つまり、このまま独身を貫けばどうなるかというイメージを提示することで、求愛を受けた方が処世としては賢明であり、源氏と縁を持つことがどれほど幸いなことであるかを具体的に示してみせたのである。しかし、それでも朝顔は最後まで源氏を受け入れない。大宮が手に入れたような人生が手を伸ばせば届くところにあるというのに、朝顔の源氏に對する態度はそれまでと何ら変わるところがないのである。

女五の宮との対面を終えると、源氏は朝顔を訪ねる。物語の中で初めて朝顔と対座する源氏は、南廂の間に通されて、さっそく「今さら若々しき心地する御簾の前かな。神さびにける年月の勞数へられはべるに、今は内外もゆるさせたまひてむとぞ頼みはべりける」と不満を漏らしている²⁰。御簾の外に置かれたことを「若者扱いだ」と責め、長年あなたを慕ってきたのだから、御簾の中に入れてくれてもよさそうなものだと苦情を述べているのである。「今さら若々しき心地する・・・」「神さびにける年月」、こうした言葉の端々にあるのは源氏の年齢的な自覚である。その自覚は去り際に残した「齡の積もりには、面なくこそなるわざなりけれ。世に知らぬやつれを、今ぞとだに聞こえさすべくやはもてなしたまひける。」²¹といった言葉にも見出せる。このとき源氏は三十二歳になっていた。朝顔もまたそれに近い年齢だったはずで、源氏の訪問を受けた後、「過ぎにしものあはれとり返しつ」という心境になるのも、それなりの年齢に達した女性ならではのことであろう。要するに、二人はもはや中年の男と女なのである。しかし、それでも源氏は昔からの変わらぬ恋心を訴え、朝顔もまた昔からの対応で源氏との距離を守ろうとしていた。結局、両者の間には「会わない時間」がかかる〈魔法〉など通用しなかったのである。「⑩賢木卷」での思いはそのまま氷結して保存さ

れ、九卷分の時間を経ても新しい何かが生まれることはなかったのである。

もう少し詳しくみておきたい。最初の対座から、なおも朝顔をあきらめきれない源氏は「見しをりのつゆわすられぬ朝顔の花のさかりは過ぎやしぬらん」と贈歌する。素っ気なかった朝顔に対する軽い意趣返しなのか、失礼にも「あなたも盛りを過ぎたのではないか」と投げかけると、今一度「年ごろの積もりも、あはれとばかりは、さりともし知るらむとなむ、かつは」と訴えるのである。それに対して、朝顔は「秋はてて霧のまがきにむぼほれあるかなきかにうつる朝顔」と返歌するものの、これは「返事を出さないのは悪い」という常識的な感覚と女房たちの勧めがあつて返されたものであり、朝顔を思つて夜も目覚めがちな源氏とは感情に大きな開きがある。源氏は「たち返り、今さらに若々しき御文書きなども似げなきことと思せども、なほかく昔よりも離れぬ御気色ながら口惜しくて過ぎぬるを思ひつつ、えやむまじく思さるれば、さらがへりてまめやかに聞こえたまふ。」とまで思いを巡らせる。いまさら若者めいた恋文などは自分には似合わない。しかし、見向きもされないというわけでもないから、このまま本意な状態で過ごしてしまつてよいものだろうか——このように、恋愛に不慣れた男さながら思い悩む源氏の希望もむなし、朝顔は「②①少女巻」巻頭、源氏との結婚を勧める女五の宮に対して、「いまさらにまた世になびきはべらんもいとつきなきことになむ」と答え、その時点で、源氏と朝顔の物語は一応の結末を迎える。ただし、二人は決して永遠に決別するわけではなく、その後も少ない回数ながら交流の場面は用意されるのである。

姥澤隆司氏は『哀傷と交情の構図——朝顔巻の光源氏と朝顔宮』で、次のように述べておられる。「確かに朝顔巻で源氏は朝顔宮に対して一貫してその恋情を訴え続ける。だが、二人の関係の基調には、常に〈風雅

の友〉となりうべき相互信頼と敬愛の情が流れているのである。ここに、両者の関係が愛憎相半ばするような生々しい一般の恋愛沙汰とは一線を画する所以がある。」姥澤氏の「〈風雅の友〉となりうべき相互信頼と敬愛」という言葉を裏付けるのは、源氏の朝顔評である。

H つれなながら、さるべきをりのあはれを過ぐしたまはぬ、

I 前齋院の御心ばへは、またさまことにぞみゆる。さうざうしきに、何とはなくとも聞こえあはせ、我も心づかひせらるべきあたり、ただこの一ところや、世に残りたまへらむ

Hは引用Eの一部であり、Iは紫の上を相手に、昔今の女性を話題にその人物評を聞かせる場面からの引用である。『全集』はIの傍線部を「寂しい思いのするときに、別段の用がなくともお話相手にさせていただいて、こちらも気を引き立てずにはいられないようなお方」と訳している。「何はなくとも」という物言いは嫉妬に苦しむ紫の上への配慮である。ただ、「さうざうしきに」の一言に嘘はない。その証拠に、引用Hは葵の上を亡くしたばかりの頃、源氏自身が朝顔に文を送ったときに述べられた感想である。また、他にも藤壺の出家を知つて雲林院に籠もつたときも、源氏は朝顔を思い出して文を送っている。

源氏にとつて、朝顔は「寂しいときに思い出す人」なのかもしれない。もちろんこの表現は朝顔という人物のすべてを語るものではない。しかし、「相手の気持ちを知りながら、それでも一定の距離を保つ」という態度は、見方を変えれば「相手の感情がどのようなものであれ、決して絆を断ち切らない」という姿勢ともとれる。たとえそれが礼儀や習慣に拠るものであったとしても、その時々にはふさわしい洗練された「形式」が

相手に届けられるのなら、相手の心が離れることはない。若い頃から源氏と朝顔はそんな交流を繰り返して年齢を重ねてきたのではなかったか。姥沢氏が指摘された「恋愛沙汰を越えた共感的感情」はそんなところから生まれたもののように思われる。朝顔は源氏の気持ちを受け入れない。「源氏と結婚しない」と決めたからである。しかし、常に期待を裏切らない存在として、尊敬できる女性として、長きにわたって源氏の心の住人になったのである。

5. 結語

朝顔はなぜ源氏と結婚しなかったか——その謎解きの答えをひとつに絞ることは不可能である。やはり当時の社会事情も含めて、様々な要因があつてのことだと判断するのが自然であろう。しかし、「もし六条御息所という人物が存在しなければ、朝顔は求愛を受けたか」という問いには、それなりに答えが用意できるのではないだろうか。

作者が若き日の朝顔に六条御息所の苦しみを伝え、「あの方のようにはならない」と決意させたことは間違いなく事実である。朝顔も六条御息所とともに教養のある聡明な貴婦人であつた。それが明暗を分けるように、源氏からまったく異なる扱いを受けることになってしまう。この経緯をたどれば、六条御息所が先に源氏と結ばれ、多くの哀しみを背負つたおかげで、朝顔という人物の輪郭ができあがったかのようにもみえる。また、朝顔が齋院として卜定されたのは紫の上浮上を実現させるためであると述べたが、これも見方を変えれば、武部卿宮の姫としての自負を守ろうとする朝顔に、その目的を遂げさせるためだととれる。だとすれば、朝顔は他の女君と向き合うことで「何が幸いなのかわからない」という事態を作り出し、自らには自然と「幸い」を引き寄せる女君なの

かもしれない。

朝顔は最後まで源氏を受け入れなかった。その一貫した態度は、源氏の限界を示すと同時に、心をひかれ合いながら結ばれない関係があつてもよい。恋愛沙汰とは次元の異なる男女の関係があつてもよい——作者のそんな思いが反映されていたと考えるのもよいのではないだろうか。

『恋人たちの予感』の脚本を書いたノーラ・エフロンは、自らの離婚経験をもとに映画の脚本を書いたこともある脚本家・映画監督である。そんな「手強い」現代女性でも、「男と女の間に友情は成立するか」という問いには決定的な答えを出さなかった。しかし、『源氏物語』の作者は自分なりの見解を持ち、それをさりげなく作品の中に書き込んでみせたように思えてならない。

注

- ① 『恋人たちの予感』(原題 "When Harry met Sally...") 監督ロブ・ライナー 脚本ノーラ・エフロン 出演ビリー・クリスタル、メグ・ライアン 他 コロンビア映画
- ② 『バルカン超特急』(原題 "The Lady Vanishes") 監督アルフレッド・ヒッチコック 脚本S・ギリアット、F・ラウンダー 出演マーガレット・ロックウッド他 一九三八年公開(日本での公開は一九七六年) MG M映画 イギリス娘と民族音楽を研究する青年が列車内から忽然と消えた老婦人を探す物語。二人は当初、青年がホテル内で立てる騒音をめぐって対立する。
- ③ 『日本古典文学全集20 源氏物語①』九五頁 四行目
- ④ 『日本古典文学全集21 源氏物語②』一九頁 一〇行目〜一四行目
- ⑤ 『日本古典文学全集21 源氏物語②』一八頁 七行目
- ⑥ 『日本古典文学全集21 源氏物語②』一九頁 五〜六行目
- ⑦ 『日本古典文学全集21 源氏物語②』二五頁 一五行目〜二六頁 五行目

- ⑧ この場面は『日本古典文学全集21 源氏物語②』五一頁 四行目から始まる。
- ⑨ 『日本古典文学全集21 源氏物語②』五七頁 八行目～五八頁 六行目
- ⑩ 源氏は『⑩賢木巻』でも朝顔への文に高級な唐渡来の色紙(唐の浅緑)を使っている。
- ⑪ 『日本古典文学全集21 源氏物語②』五八頁 六行目～一二行目
- ⑫ 源氏は齋宮が左衛門府に入ったことで、その潔斎にかこつけて六条御息所と没交渉になっていた。そのような状況で御息所の使いがこっそり届けに来たのがこの文であった。
- ⑬ たとえば、池田亀鑑氏は六条御息所について次のように述べている。「藤壺とそれから小さな藤壺としての紫の上とを二重うつしにするために、葵上を強いて排除するという不幸な宿命を負わされて登場する。」(『物語文学I』「長篇的各説話とその成立24六条御息所物語」より。)
- ⑭ 『全集』の頭注によると、『源氏物語』成立以前の孫王(先帝の孫)が齋院になった例は文徳天皇の孫真子(直子)ぐらいだという。
- ⑮ 工藤重矩氏は『源氏物語の結婚』(中公新書)で「結婚の順序にかかわらず、初めから妻は妻として結婚し、妻以外の者はそのような立場の者として関係をもった。」「平安貴族女性の世間的幸せは『妻(＝正妻)』であることが絶対条件である。だから、『妻』ではない紫の上の「つま(連れあい)」としての幸せを語るためには、常に他の女よりも愛されていることを示し続ける必要がある。それゆえ、源氏と関係する女はみな最後には源氏と別れなければならない。」と述べている。
- ⑯ 『日本古典文学全集21 源氏物語②』一四七頁 一〇行目～一三行目
- ⑰ 『日本古典文学全集21 源氏物語②』四六九頁 一二行目～四七〇頁 三行目
- ⑱ 『源氏物語の人ことば文化』第四章 回顧と喪失の構造―「朝顔」巻― 六一頁 一～七行目

- ⑲ 『日本古典文学全集21 源氏物語②』四七二頁 六行目～九行目
- ⑳ 『日本古典文学全集21 源氏物語②』四七三頁 八行目～一一行目
- ㉑ 『日本古典文学全集21 源氏物語②』四七五頁 三行目～五行目
- ㉒ 『日本古典文学全集21 源氏物語②』四七六頁 七行目～八行目
- 朝顔の返歌は同頁一三行目
- ㉓ 『日本古典文学全集21 源氏物語②』四七七頁 七行目～一〇行目
- ㉔ 『日本古典文学全集22 源氏物語③』一九頁 一四行目～一五行目
- ㉕ 『帯大谷短期大学紀要』第二十三号 昭和六十一年三月 帯大短期大学 二〇頁
- ㉖ 『日本古典文学全集21 源氏物語②』五八頁 八行目
- ㉗ 『日本古典文学全集21 源氏物語②』四九二頁 一一行目～一四行目
- ㉘ 『日本古典文学全集21 源氏物語②』一九九頁 一行目～「唐の浅緑の色紙」を使った場面である。(注⑩参照)

参考文献

- 新編日本古典文学全集20 『源氏物語』① (1994)
- 新編日本古典文学全集21 『源氏物語』② (1995)
- 新編日本古典文学全集22 『源氏物語』③ (1996)
- 校注・訳阿部秋生 秋山虔 今井源衛 鈴木日出男 小学館
- 池田亀鑑 『物語文学I』(1968) 至文堂
- 姥澤隆司 「哀傷と交情の構図―朝顔巻の光源氏と朝顔宮―」
- 『帯大谷短期大学紀要』第二十三号 昭和六十一年三月 帯大谷短期大学
- 工藤重矩 『源氏物語の結婚』(2012) 中公新書2156 中央公論社
- 藤本勝義 『源氏物語の人ことば文化』(1990) 新典社